

真剣で人生楽しんでますか？

アミ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

遊んだり、サボったり、暴れたり、青春したり、腑抜けた男のおはなし。

# 目次

	第一話	落第(ギリギリ)野郎! Fチーム	1
	第二話	ブロンドが白馬でやって来る	18
	第三話	咳と共に去りぬ	37
55	第四話	dream☆regain	



# 第一話 落第（ギリギリ）野郎！Fチーム！

「おっはよー！」

「あ、ワン子。おはよー」

机上に、ぐでー、とあごも肘も、肩すらのつけてだらけモードで挨拶を交わすクラスメイトを眺める。

もう四月も末だ。そろそろこのF組のたるんだゴム紐のような空気にも慣れた。

古巣の張り詰めたような空気も嫌いではなかったが、一度この泥濘にわかると最早這い上がる気力など湧かない。

．．．．．昨年度の学年末テストの結果、281人中、280位。

昨年、常に一桁上位だったのだが、ひどい結果だ。

末路、とでも言おうか。零落のきわみ、とでも。

テスト勉強を怠ったのが原因ではない。

そもそも、ここは進学校とはいえ、落ちこぼれと成績優秀者が混在する程度の偏差値

の学校でしかない。

さほど難しくもなし、授業を聞いていれば当たり前に解けるような問題ばかりで、見返してみれば悩むような問題など一題もなかった。

ならば、なぜ？

うっかりテスト中に寝てしまったからだ。

ぼんやりしてテスト一日目の一時限目にテスト用紙を唾液でふやかして、それ以降はほとんど名前だけ書いて提出した。

要は、やる気がないからだだった。より正確をきすならば、なくしてしまった。

進学校を受験して、他者を蹴落としてまで一年もの間特進クラスに居座っておいてなんだが、正直なところ、理由はそれだけでしかなかった。

その結果、F組に移動させられたわけだが、さほど居心地は悪くないし、後悔もしていない。

F組の彼らにはS組生徒への恨み言を何度か言われたが、直接の恨みも無し、コミュニケーションへの恨みを個人にぶつけることのむなしさでも知ったのか、すぐに止んだ。

「ふあーあつ」

いかん。そう思ったが、あくびは止まらなかつた。

やる気をなくしても、最低限シヤンとしようとは思っているのだが、どうにも。

このどうしようもなく、どうでもいい気持ちはなんとかならんものか。

こんなことでは新しい担任教師に怒られてしまう。美人だが、あれは鞭を振るうのだ。

教鞭ではない。インデージージョーンズが持つていそうな、あれだ。

そんな、あれ、でしばかれて大喜びしているクラスメイトもいるにはいるが、プレイにしてももうちよつとソフトなところから始めて欲しい。

冷たい水で顔を洗えばいくらかマシになるだろう。そんなわけで、顔を洗いにトイレへ向かう。

・

・

・

「ヒュッホ、S落ちした久世ではないか。猿山では馴染んでおるのか？」

「.....」

廊下に出たところであつてのクラスメイトとエンカウントした。

不死川心という、いつも着物姿の変わりものだ。

親のカネだかコネだかで私服通学を認めさせているらしい。

顔は可愛いが、根性悪いせいで友達はいないようだった。

ちなみに、S落ちというのは、特進クラスのS組から落ちること。テストで50位以下になるとそうなる。

それを恥じ、成績が伸び悩んでいるものはS落ちになる前に自主的にS組を去ることが多いので、あまりいいない。

「何か用か？」

「落伍者を笑いにきたのじゃ。2位から280位じゃったか？ ヒュホホホ！」

彼女がF組の生徒を馬鹿にしていることは知っている。

一年の時分からたびたびやっていた。振り返ちにあつて泣かされても懲りないあたり、相当ハマっているらしい。

趣味なのか。ライフなのか。それがお前の人生なのか。楽しそうだなによりだ。



とはいえ、皮肉だか挑発だかの内容はともかく、やられたらやり返したくなるのが人情と言うもの。

「前からずっと思つてたんだけど、お前の笑い声つてなんか変だよな」

「へ、変ではないわ！ これは高貴なる高笑いであつて……つて、去るなー！」

言うだけ言つて逃亡。顔を赤くして怒つていても、トイレまでは追つてこれまい。

いつも成績があれの上だったから、目の上のたんこぶだと思われていたらしい。

それで、今回俺がアホみたいな成績をとつたから追い打ちに来たらしい。

悲しむべきことに、S組の連中にはああいった手合いが多い。といつても、大多数の連中はそのうち飽きるだろう。

益体もないことに情熱を燃やすかつてのクラスメイトの顔を思い浮かべつつ、洗面所で顔を洗う。

日中の気温は上がってきていても、朝の水は冷たくて気持ちがいい。

「ああ、冷てー」

「おや、久世君。あなたでしたか」

「そういう君は……なんだ、葵と、井上か」

背後から声をかけられ、振り返れば中性的かつエキゾチックな雰囲気的美男子と、長身痩躯の坊主頭が。

美形のほうは葵冬馬。川神市でも評判の総合病院、葵紋病院の院長の一人息子。

ハーフだそうで日本人離れた容貌を持っており、川神学園でも有名な美形四天王の一人なのだそう。

ちなみに、成績一位。

元クラスメイトということ以外、大した関わり合いは無い。

そして、坊主のほうは井上準。

葵紋病院の関係者、冬馬の父の腹心、No. 2、その息子。だから冬馬を若と呼ぶ。

人付き合いよく性格も温和だが、その一方で少女趣味を隠す気もない変人でもある。

本人は父性だと言って聞かないが、年端もいかぬ女兒を見つめて息を荒げる姿は控えめに言っても変質者のそれだ。

そのうち新聞の三面あたりに載るかもしれない。

「なんだとはぐっ挨拶だな」

「すまない。まだ頭がしやきつとしてないんだ」

冗談めかして言った井上に言い訳しながら、チエックのハンカチで乱雑に顔を拭う。首周りに水がついてしまったが、すぐに乾くだろう。

「不死川さんが外で投げ技のイメージトレーニングをしていましたよ」

「しつこい女だ……男子トイレの前で待ち伏せだなんて、淫乱め」

「そういうことを言うから喧嘩になるってわかってるかー？」

「……わかってて言ってるんだろーな」

少し考えてから、諦め混じりの口調で井上は付け足した。

「なんだ、朝から疲れているのか。早めの五月病で生活リズムでも崩したか」

「お前が言うか。というか、早すぎる五月病はお前だろ？」

本当に疲れたように肩を下げて井上はため息を吐いた。

まるで非人道的なサービス・ザンギョー・ワークを課せられている公立学校教諭のよ

うだ。

背が高く、大人びているからなおさらそう見える。

「……まあ、どうにもやる気がない。なんか楽しいことないかな」

「この写真でも見て心を和ませたらどうだ？」

懐から滑らかな動きで取り出したのは、幼稚園児だか小学生だか、とにかくまだいたいけな子供の写真だった。

かわいらしいとは思いますが、永久歯も生え揃っていないようなティーン未満ではなんとも。

「流石にもうちよい育つてからのほうが、こう」

「かーっ、この良さがわからないとは可哀想なヤツだねー。邪念を一度横にどかしてから見つめてみるよ。心洗われるようだろう？」

「邪念に塗れているのはお前だ」

NO THANK YOU とジェスチャーで示して小児児童の写真をつき返した。

ロリコン趣味は結構だが、人目があるところではグレーゾーンに留めておいてほしい。

「楽しいこと、ですか……」

「こう……希望とやる気が湧いてくる感じのイベントはなकारうか」

「では、私と夜景の見えるホテルでディナーでも」

「それは結構だ」

冗談なのか、本気なのか興味はないが、彼はバイを公言している。

確かに彼の骨相は中性的で、肌はそこらの女よりもきめ細かい。

控えめに言っても整った美しい容貌と言えるだろう。

だが、生憎そうだったソドミーな趣味はないし、開拓する気もない。

「まあ、若の悪い癖は置いておくとして……今日は転校生が来るんじゃないか。F組だろ？」

「ん……そうだっけ？」

いつかホームルームで担任教師が話していたような、話していなかったような。最近本当に注意力が散漫になっている。

このままでは通知表の内申点は悲惨なことになるだろう。

しかし、悲惨なことになるだろう、とわかっているのだが危機感がわからない。

「ドイツからの留学生のことですね。噂では男性だと聞きましたよ。本当かどうかは知りませんが」

「というか、廊下でF組の生徒が賭けやっつけたしな。男か女かって……というか、噂流したのも多分あいつらなんじゃないか？」

率先して賭け事をやろうとするタイプのも、F組の顔ぶれが頭にぱつと浮かんだ。

葵冬馬と同じく美形四天王に名を連ねていて、いつも落ち着きのない風間翔一。

風間の幼馴染で軍師とかいうあだ名の、いつも携帯いじっている直江大和。

そして同じく風間の幼馴染で、いつもうるさい島津岳人だった。

彼らは幼馴染の七、八人で風間ファミリーという集団をつくり、よくつるんでいる。

「噂は男だったな……それじゃあ来るのは女か。有り金全部賭けてこよう」

「おいおい、女だって確証はないぞ？」

「いいんだよ、あんまり入ってないしな」

「確証を得る方法が無いわけではありませんがね」

「調べて無いのか？」

「どちらでも構いませんから」

「……………」

柔和な笑みを浮かべる葵はどこからどう見ても爽やかな美少年だが、近寄る気にはならない。

言葉を見殺すように窓に歩み寄り、視線を外へとめぐらせた。

「オッサンだ」

「はあ？」

ふと、視線の先の職員用昇降口に年配の男が入っていくのが見えた。

黒いジャケットは遠目にも派手に飾られていて、まるでどこかの軍隊の将校のようだ。

少なくとも、学校に用事があるような人間には見えないが、ひよつとしたら転校生の親御さんかもしれない。

嘘か本当か知らないが、どこかで聞いた話によると軍人の正装は軍服だとか。

「親御さんでしょうか？」

「どれどれ、洋ロリは……」

「いないよ」

しかし、近くに転校生らしき少年少女の姿は無い。

既に昇降口を上がってしまったのか、それとも別々に来るのか。

ふと、どちらでもいいか、と白けてしまつて教室に戻ることにした。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

便所前では、葵が言っていたように出待ち状態の不死川が空気相手に投げ技の練習を



していた。

「むっ、ようやく観念したっ、むぎよわー!」

向こうがこつちに気づくと同時に、ピッ、ピッ、と指先から飛沫を飛ばして攻撃。

「楽しいこと楽しいこと……うむ、お前をいじめるのはなかなか楽しいぜ」  
「おっ、お前此方にそんな態度をとっていいと思っておるのかっ!」

顔についた水滴をハンカチで拭いながらも、半泣きになる不死川はなかなか可愛い。  
たまには好きな子をいじめる男子小学生的なメンタルに戻るのもなかなかいいかも  
しれない。

「……いや、よくない。もうちよつとましな楽しみを見つけたほうがいいだろ  
う。」

ともかく、彼女はどうにも涙腺が緩いらしい。

誰彼構わず喧嘩を売って、返り討ちにあつて半泣きになっているところをたびたび見  
る。

「泣くなよ子蟹ちゃん」

「泣いておらぬわっ！　というか、此方のどこが蟹なのじゃー！」

「かに座っぽいよね」

「だったら何だというのじゃ！　まったく……S落ちしてからはまるで人が違ったようじゃな。バカクラスに毒されきっておる。えんがちよー、なのじゃ」

バカクラス呼ばわり自体に異論はないが、中にはお前より成績も人間性も上の人もいるんだぞ、と思ったり。

井上お気に入りの女子生徒、甘粕真与は前年度最後のテストで学年四位だった筈。

家業が傾いている上に、幼い弟妹も多いらしく、少しでも家族に楽をさせようと特待生待遇を求めて頑張っている。

新学期早々、弁当を盗まれたりセコい嫌がらせを受けていた俺を助けてくれたのも彼女だ。

井上が眺めていて心洗われる気持ちもわからぬではない。

「こなたわあ、まえからこんなもんなのじゃああー」

「真似するなー！ しかもバカっぽくアレンジするでないわー！」

「あれんじなんてえー、してないのじゃあー。ふしかわこころわあー、いつつもこんなかんじなのじゃあー」

「うぬぬ……バカにしおつてえ。食らえつ高貴なる内股っ！」

下手糞な物まねがよっぽど腹に据えかねたのか、茹つたカニみたいに顔を真っ赤にして激怒する。

叫んだ技名どおり、なかなか高貴な所作での内股が炸裂。

いかにも動きづらそうな振袖なのにたいしたものだ。

くるり、と視界が回転して床へ腰と太ももから激突した。一応後頭部を打つたりしないように気を使って投げたらしい。

とはいえ、ポケットに入っていた鍵が肉にめり込んで疼痛をもたらしている。

「痛いぜよ……」

「ふっ……ふん！ 此方を馬鹿にした罰なのじゃ」

「いい技だ、なかなか鋭い内股だったぜ。確か、小さなカニにもハサミあり、つてことわざがあつたな」

「無いわ！ いい加減カニから離れぬか！」

無かったつけ？と言いつつ、立ち上がる。

制服が少し汚れてしまったかもしれないが、ここ数日脱いでも椅子にかけるだけで口  
クに吊るしもしなかったもので、どうでもいい。

変えの制服がないわけでもなし、クリーニングの出し時かもしれない。

「そういや、転校生が来るって知ってる？」

「ホームルームの時にヒゲが言っておったな。独逸人じゃったか」

ヒゲ、というのはS組の担任教師、宇佐美巨人の愛称だ。

一応優秀らしいが、やる気とか清潔感とか紳士さとか真摯さとかいろいろ足りていな  
いので付けられた、ある意味蔑称でもある。

……とでも他人事だと思えない。

「そうそう。その転校生が気になるからそろそろ俺教室に戻るわ」

「ふん、みいはあじやのう。山猿らしいと言えばらしい……」

言うが早いか、不死川に背を向けて教室へと歩き出した。

転校生転校生。遺跡に潜ったり十字キーで感情表現したりするのだろうか。

益体もないことを考えながら、ぎやあぎやあと背後でわめく不死川を無視して教室へ戻るのだった。

## 第二話 ブロンドが白馬でやって来る

「あつ、クゼちゃんおはようございます」

「はよーつす、甘粕ちゃん。今日もツイントールがばつちり決まってるな」

「え、えへへ、そうですか？　ありがとうございます！」

にこやかに笑顔を返すと甘粕真与は頬をピンク色に染めてはにかんだ。

井上ではないが、こうも初々しい反応を見せてくれると意味もなく褒めたくなる。

いや、彼女はいいやつだし、いつも学級委員の仕事なんか頑張っている。

素直に尊敬できる人間だから、まったく理由もなく褒めているわけでもないか。

逆に不死川は特に理由もなくいじめたくなる。

「さつき聞いたんだけど、今日転校生来るんだってな」

「昨日も一昨日もホームルームで言っていましたよ？」

「いや、こう、夜道で記憶を落っことしてしまつて」

誤魔化すようにあいまいな笑みを浮かべて頭をかいてみせた。

最近、ことさらに気が抜けていたから、記憶を落としてもそれにすら気づかない有様である。

くだらない恨みごとや、どうにもならない悩み事、忘れてしまいたいことほどこびりついているクセに。

人間の脳というのはえらくひねくれた仕様をしている。

それとも俺の脳味噌だけだろうか。

「おはよっ！ 転校生来てる？」

「いけませんよチカちゃん。廊下を走っては」

「あ、ごめんごめん。おはよさんマヨ。クゼっちも」

「おっすオガサワラっち」

「それ語呂悪くない？」

「サワラっち」

「魚？」

おはよ、と笑顔で挨拶してきてくれたのはクラスメイトの小笠原千花だった。

流行なんかには敏感で、ファッションでも音楽でもテレビでも広くアンテナを張っている。

数名の男子とは犬猿の仲のようだが、基本的にノリがよくて面倒見もいいため男女問わず人気が高い。見た目も垢抜けた美人だ。

甘粕とは特に仲がいいようで、よく楽しげに話している姿が見られる。

「転校生まだ？」

「まだですよ。ホームルームで自己紹介するんじゃないでしょうか」

「まだかあ、アタシ男に賭けたんだよねー、転校生」

「賭けか、そういやそんなものもあるんだよな。今いくら持ってたつけ……」

財布を尻ポケットから取り出す。

無数のレシートと、以前のアルバイト先の給与明細、レストランやカラオケのクーポン券が数枚。

そして、野口英世が一人。小銭と合わせて全部で二千円弱。



「うわっ、さびしー……」

「ええい、見んじゃねー」

「アタイ的に金持つてない男とか男じゃねーわ」

「地球の言葉で話してくんない？」

「日本語喋つてんだろがオラツ！」

唐突に会話に混じつてきた上に掴みかかってくるとは畜族かこいつは。

こいつは羽黒黒子。死語だが、いわゆるガングロ……というか、ヤマンバ。得意技は毒霧。当然のように素行も悪い。

今となつては絶滅危惧種だが、昔の日本にはこういう生き物もたくさん生息していたらしい。

公式の登場人物紹介でさりげなく2―Fではなくその他に分類されている哀れなヤツでもある……登場人物紹介？

俺はいつたい何を……？

「男の価値を財産で測るのはやめなさい」

「金はゼンテーだし。イケメンでアレもでかくねーと」

「お前ちよつと死んだほうがいいぞ」

「あれ………?」

「ちよつと羽黒! 朝からやめてよね!」

「はっ、あ、あわわ、そういうことでしたか………! 羽黒ちゃん、お下品ですよ!」

「メンゴメンゴ」

口々に責められ、羽黒は誠意の欠片も見えない謝罪を口にする。

この女、明け透けに言うだけあってなかなか凄まじい恋愛遍歴を持っているらしい。

素行も口も悪いし、容姿も優れているとは思えないのだが、どこに男たちは惹かれたのだろう。

失礼ながら、金持ちでイケメンでアレなのでかい彼らは、本当に実在するのでしょうか。

それとも、アマゾネスよろしく狩ったということか。なんだかいろんな意味で恐ろしいやつだ。

「まあ、それでも一年の時のギラギラしたクゼだったらアタイ相手したんだけどなー。ウチのクラス来たぜウツシャと思つたら腑抜けてるしよー」

「願い下げだ」

「でも今は転校生一筋系だから。オメーの気持ちには答えられないから」

「……………! ……ツ!」

「お、落ち着いてください久世ちゃん」

意思疎通は不可能だ。そう、わかっている筈なのだが腹が立つ。

毛穴が開き、目が据わり、爪が手のひらに食い込むくらい腹が立つ。

これはある種の才能かもしれない。

「そんなに嫉妬すんなってーの。カナシーけど、恋愛ってそーゆーもんだから」

「……………」

このまま忍耐力を試されると暴力事件を起こしてしまいかねない。

この場を離れて少し歩くのもいいかもしれない。

そう思い立ち、席を立とうとする。

「みんな、おはよう」

そんな時、出鼻を挫くかのように教室の戸が開かれた。

やってきたのは誰であろう、F組担任教師の小島梅子だ。小島先生、と呼称しよう。

レディーススーツの似合う妙齡の美女だが、手にした鞭はいかにも妖しい。ちなみに未婚。

時計が示す時刻はホームルームにはいくらか早いが、転校生を迎える為だろう。

「全員いるな？ホームルーム前に全員揃っているとは、よほど転校生が気になると見える」

その言葉に、さりげなく教室を見回してみると、確かに全員揃っていた。

問題児クラスのF組。いつも遅刻ギリギリという連中はむしろ多数派であったが、問題児でも転校生は気になるらしい。

俺だつて気になる。

「それでは、お待ちかねの転入生を紹介しよう……入りたまえ」

「グーテンモルゲン」

「……………」

見まごうことなく先ほど便所の窓から見つけた男であった。

・  
・  
・

・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・  
・

当然だが、彼は転校生ではなかった。

そして、本当の転校生は今、教室の窓から見下ろすグラウンドの真ん中に一人と一頭でいた。

「クリステイアーネ・フリードリヒ!! ドイツ・リユールベックから推参! この寺子屋で今より世話になる!」

グラウンドでは、金髪碧眼の美少女が鬘摩かせた白馬に跨って大見得を切っている。ほかでもない、彼女が噂の転校生だ。

白馬で登校と素っ頓狂なシチュエーションではあるものの、アイドルもかくやといった美少女である。

彼女の動作に合わせて窓から顔を出していたクラスメイト達が歓声を上げた。

「マジモンのパツキン美少女じゃねーかッ！」

「ちっ、女かよクソがっ………五千がパーだ」

「ちつくししょう！ヒゲのヤロー騙しやがったな！でもそんなどうでもいいや！超可愛い！」

男子たち数名が目を血走らせて奇声を上げた。

気持ちとはともよくわかる。実際ものすごく可愛い。

そんじよそこらの美少女とは存在感が違う。

見目麗しさを形容する為には、いくら美辞麗句を並べ立てても足りないぐらいの美少女である。

眩い絹糸のような金髪に、深い湖のように透き通った碧眼、きめ細かい陶磁のような白皙とでも言おうか。

「美形だなあー、金糸のような、つつーの？ この辺りじゃあんまり見ないよな」

「主語が抜けていてわかりづらいですよ」

「言いたいことはわかるけどね……こりや負けたわ」

白旗を揚げるように肩を落としているが、小笠原だつて充分以上に美人だ。

だが、確かにあれはなんというかこう、普段目にしない分レア度が違うかもしれない。

「パツキン担当だつたらアタイがいんじゃない。アハン」

「鼻フックすんぞテメー」

なんだ羽黒。

なんだそのポーズは。

そしてなんだそのアハンってのは、とうかお前の鼻はどこにあるんだ。

とかなんとか考えているうちに転校生が馬を繋いでやってきたらしい。

彼女が教室に入ってくると、にわかにはクラスがうるさくなつたが、小島先生が見渡すだけで統率されたように静かになる。

そして、金髪の少女は黒板にカタカナでクリステイアーネ・フリードリヒ、と書き込

み、クラスメイトたちに向き直って一礼。

「クリステイアーネ・フリードリヒだ、クリスと呼んでほしい。改めてよろしく！」

.....

.....

.....

「自分はこの国で多くのことを学べると確信している。迷惑をかけることも多いと思うが、仲良くしてほしい！」

そう、転校生は自己紹介を締めくくった。

五分にも満たない自己紹介で得た印象としては、世間擦れしていない箱入り娘といったところ。

故郷のドイツはリユーベックには日本人の友人が少なからずいたそうだ。

彼らに勧められて見たドラマを切っ掛けに日本に興味を持ったそうなの。

大和丸夢日記やら鬼兵犯科帳やら、時代劇の名称を挙げて武士道精神の素晴らしさと



やらを語ってくれた。

しかし、少しばかり箱入りが過ぎるようだ。

観光で立ち寄った映画村を実際に住民が時代劇さながらの生活を送っている場所だと思っていたり、インターネット上に出回っているコラーージュに騙されたり、フィクションを現実と混同しているようで、少し頭が緩いのもかもしれない。

ともあれ、自己紹介から見て取れた快活で正義感が強そうな人間性は好感が持てる。美少女だし、是非とも仲良くなりたいものだ。

「クリスの父、フランク・フリードリヒです。ドイツで軍人をやっております。一年間娘が世話になります、よろしくお願いします」

そんな彼女に続いて、流暢な日本語で彼女の隣の年配の男が挨拶した。

案の定、転校生の保護者らしい。

言葉の通り、帽子や襟、胸や肩はたくさんさんの徽章で飾られていて、いかにも軍人のそれだ。

外国人の年齢はよくわからないが、見た感じ五十歳前後だろうか。

他国の学校に非常識な格好でやってきたものだから非常識な人間かと思いきや、案外

物腰は穏やかだ。

意外と親しみやすい人かもしれない。

そんな風に考えたのは俺だけではないらしく、視界の隅で大柄な男が身を乗り出した。

噂の風間ファミリーの島津岳人だ。

美少女とその父親に好印象でも与えたいのか、彼はにやけた面でお追従を言う。

「クリスもお父さんも日本語上手いんすね！」

「貴様にお義父さんなどと呼ばれる筋合いはないッ!!」

前言を撤回する。

親しみやすいなどとんでもない。

身の丈百九十近い偉丈夫も、一瞬にして氣勢をそがれるおつかない怒号が教室に響き渡った。

その上、懐から本物かフェイクか見分けはつかないが、拳銃を抜いている。突然の凶行に教室中の皆が絶句した。

「あ、あの、あれはお調子者ですが、そういった意味で言ったわけでは」

「……いえ、こちらこそ申し訳ない。私は娘のこととなると少々度が過ぎてしま  
うようでして」

額に冷や汗を浮かべる小島先生のプロローによって島津は延命された。

軍服の男は口元を引きつらせる彼に向き直ると、肩に手をやって諭すように語り掛  
ける。

「君、すまなかったな。あまりにもふざけたことを言うものだから興奮してしまった」

「は、はい、すみません……」

そして、拳銃を手にしたまま、じろり、と俺を含む教室の男子生徒たちを見回した。

俺は今、娘にちよっかい出したらわかっているよな？　と言外に仄めかされたよう  
だ。

非常識な格好以上に中身もクレイジーらしい。

「父は高潔な軍人で自他共に厳しいんだ。驚かせたならすまない」

「……………」

まだ黒光りする金属の塊が視界の隅に映る間は、特に父親の行動に疑問を持つていない娘の言葉にも反論する人間はいなかった。

「……………父君、そろそろ」

そんな中、不意に小島先生が転校生の父親に声をかけ、予定が押していることをジェスチャーで伝える。

しかし、時計を見る限りそこまで急かすような時間でもない。

ひよつとしたら危険人物を体よく素早く追ひ払おうとしているのかもしれない。

「む、後ろ髪引かれる気持ちだが、そろそろ時間だ。クリス、何かあったらすぐに……………」  
いや、いつでも連絡してきなさい」

娘にそれだけ言うと、彼は靴音を響かせて去って行った。

連絡すれば戦闘機で即日駆けつけるらしい。ゲルマンジョークというものだろうか。

……………本気じゃないだろうな。

ともあれ、保護者が去った教室はようやくいつもの平穏を取り戻した。

「風間、直江、椎名。彼女は島津寮へ入居する予定なので、そちらでの世話は頼む」

「ウーツス」

「先生俺には?!」

「.....」

「何すかその沈黙!」

島津寮、というのは今喚いている島津岳人の親の管理している学生寮のことだ。

このクラスにはその学生寮の寮生が四人もいる。今呼ばれたものと、もう一人

厳密に言えば寮生ではないが、家主の息子を含めれば、五人。そして今日六人となった。

普通こういった編成は分けるものかもしれないが、F組に振り分けられるような生徒は事情が事情なのでこういうこともあり得る。

「あとは甘粕、何かあればサポートしてやってくれ」

「はい!委員長としてがんばります!」

「いつもすまんな」

「それは言わない約束ですよ」

「………それでは、時間が押しているので一時間目に間に合うよう移動教室を開始するように」

ツツコミをこらえているのか、珍しく渋面をした小島先生は出席簿を持って退室した。

そして、クリスは自分に与えられた席へとやってくる。

窓際から二番目。前から二番目の席。

黒板を北と仮定して、最北西にある俺の席からちようど右斜め後ろだ。ちなみに、俺の右隣が甘粕で、背後が羽黒。

「よろしく美少女」

「ああ、よろしく………久世殿、でよかったですか？」

「殿って………呼び捨てでいいでござるよクリス殿」

「甘粕真与です。クリスちゃん。何かわからないことがあったら、遠慮せずに聞いてください」

「おお、甘粕殿。これからよろしく！」

にこやかに挨拶を交わすと、クリスは自分の席について学習用具を机にしまおうとした。

しかし、何かが既に入っているのか、怪訝な顔をして彼女は机の中に入っていた、何か、を引っ張り出す。

「箱……?」

これっくらいい。

広げた両手のひらの上にちようどのつかるぐらいの、小さな箱。

プラスチック製の……というか、まあ、弁当箱だ。不思議なことに見覚えがある。

二週間前、俺が同じようなものを持ってきていた。

あの日は昼休みに体育から戻ってくると、鞆に入れてきた弁当が消えていたのだ。

今ではかなり収まったが、元S組生徒である俺への嫌がらせの一環だったらしい。

弁当箱を買いなおすのは懐が痛いので、あれ以来昼食は学食か購買で取るようにしている。

「アハン、メンゴメンゴ。こないだ弁当食べ切れなくて入れっぱなしにしたの忘れちった」

「テメエ、表に出ろ畜族め。俺が教化してやる……おい、ちよつ、開けるな！」  
「え？」

ばかり、とパンドラの箱が開かれた。

もとい、あれはパンドラが開けたからパンドラの箱なので、この場合はクリスの箱になるのか。

ともかく、クリスの箱が開かれ、この世のありとあらゆる災厄が教室中に充満する。フタの裏に張り付いたわさびシートだか、希望だかなんだかよくわからん慰めよりも、消臭剤が欲しかった。



## 第三話 咳と共に去りぬ

異臭騒ぎによつてF組は一時間目の体育は中止となり、代わりに教室にぶちまけられたかわいそうな元弁当の掃除に充てられた。

たかが弁当箱一つ分の残飯だったが、直撃弾を受けたクリスが意識を失うと同時に床に放り出してしまったのだ。

最大の被害者である彼女を責めるつもりはさらさらないが、結果として教室中を掃除する羽目になってしまった。

もう五十分以上換気しているのだが、まだ教室には悪臭が漂っている。

最近暖かかったこともあり、弁当箱の中には黒カビを始めとして……詳細な説明は省こう。

そんな自然の脅威が詰まった箱を四重にしたビニール袋に詰めてガムテープで封印もつたないが、洗ったとしてもう一度使う気にはならない。

中身も箱もゴミとして処分することとなった。

「ちよつとお．．．．．涙が止まらないんですけど？」

目に染みる、と小笠原が教室入り口付近から遠巻きに訴える。

確かに教室に漂っていた刺激臭は、目と言わず鼻と言わず、喉の奥に突き刺さるようだった。

とはいえ、彼女は教室の掃除に参加していない。

参加したのは俺を含めて自分の机が汚れた数名だけだった。

小笠原の非難が自分に向けられているような気がしたので、一応言いたいことは言うておく。

「何よりもまず言っておきたいんだが、俺は悪くねえ。全面的に羽黒が悪い」

「アタイだって悪くねーし！ 元はと言えば弁当パチってきたの島津だつーの」

「待て待て！オレはパスしただけで、ヨンパチが．．．．！」

言いたいことを言った結果、醜い責任の擦り付け合いが始まってしまった。

悪臭爆弾の直撃を受け、保健室に搬送されたクリスがクラスメイトたちの醜態を見ずに済んだのは幸か不幸か。

それ以前に、この顛末が親御さんに知れたら先ほどのゲルマンジョークが真実になり  
そうだ。

ともかく、早いところ弁当箱を処分せねばなるまい。

責任の擦り付け合いに背を向け逃走、廊下へ脱出。

階段脇のゴミバケツに嚴重に封印した弁当箱を叩き込んだ。

ガムテープとビニールで完全密封してあるので、昼過ぎの回収までに匂いはもれま  
い。

「大丈夫か？　大丈夫だよな、多分……」

誰にともなくひとりごちて体を軽くゆすると、首や腰がぱきぱきと音を立てた。

なんだか、朝っぱらから妙に疲れてしまった。次の授業は昼寝ができないだろうか、  
と時間割を思い浮かべる。

すると、視界の隅に見慣れぬ金糸が。

見やると、クリスと甘粕が階段をあがってくるころだった。

「おっ、二人とも大丈夫か？」

「まだ少しだけふらふらします……」

「うう……ひどい目にあった。これが川神式のカンゲイ、なのか……?」

悪臭爆弾の直撃を受けたクリスト、至近弾を受けた甘粕はいの一番に保健室に搬送されていった。

今の今までくたばっていたのだろうが、ようやく回復してきたらしい。

「違う、ただの事故だ。まあ、いつもこんな感じだけど、歓迎するぜ」

「いつ、いつもこうなのか?」

「だ、大丈夫ですよクリスちゃん! こういうことは、と、時々ですから!」

額に冷や汗を浮かべるクリスを必死にフォローしているつもりの甘粕が健気だった。

まあ、そんなことよりも、今現在もっと重大な問題が発生している。

それは、眼前のF組教室前の状況だ。

ほんの数分離れていただけに、戻ってきた時には既に人だかりが出来ていた。

「いつにも増して山猿の巣がくさいのじゃ!」

「お前ら、どれだけ俺たちに迷惑かければ済むわけ？」

「ぎゃあぎゃあうるさい奴らだな……こっちはオータムマラソンで徹夜明けなんだよ。騒音公害だ、喚くな」

「わざわざその臭いところにまでやって来て因縁つけてこないで欲しいんですけど？」

掃除を終えて地獄のような悪臭から逃れた俺を待っていたのは、また地獄だった。

F組の教室前では、扉を塞ぐようにしてF組とS組の連中で口論になっているではないか。

どうやら、一時間目の移動教室から戻ってきてこの惨状に出くわしたようだ。

S組とF組、この二クラスの揉め事は珍しいことではなかった。

そして、二学年に進級する際にクラス替えを行ったにも関わらず、揉める面子は昨年とあまり変わり映えていない。

これは、F組とS組という特異なクラスの性質故のことだ。

S組は学年テストでの順位が五十位以内の成績優良者かつ、希望したのみが入れる特進クラスだ。

一部の授業内容がより高度なものである、という他に別に特権があるわけではない。

だが、S組に在籍しているということ自体が自分自身の価値になると信じているように、彼らの多くは高慢で自信過剰だ。

他者を必要以上に見下し、自分の能力を誇示しようとする傾向にある。

かくいう俺も、S組に在籍することに以前は価値を見出していた。

そして、直截に言えばF組は問題児の受け皿だ。

素行的な意味でも、成績的な意味でも。

監視が必要なモンキーは一纏めにしておこう、という腹積もりだろうか。

前者は入学時に本性を見抜かれなければ他のクラスに割り振られることもあるが、後者は入学する端からF組行きだ。

ちなみに、よくもめ事を起こす者達は大体前者と後者のハイブリッドである。

その為、一学年時からS組とは多くトラブルを抱えていた。

「こんなんじや授業に集中できないよ……悪臭まで撒き散らすなんてF組の連中は本当に最悪だな。存在自体が公害だよ」

悪意を正論で粉飾するのが所謂デキるS組スタイル。

F組生徒の素行によって他クラスに実害が出ている事は紛れもない事実だった。

下手に反論したところで揚げ足取られて煽られるのがオチだ。

第一、弁当箱を台無しにされ、腐った生ゴミ掃除をしなければならなかっただけでもうんざりしているのだ。

この上、トラブルに巻き込まれてはストレスで死んでしまう。

そう思つて気配を消して人ごみに混じろうとする。

「大体アタイらのせいじゃねーし！ オメーらのところからきたクゼのせいだし！」

「そうだ！ これは元はと言えばクゼのせい！ ひいては教育不行き届きのS組のせいだ！ オレのせいじゃねー！」

「おいコラ」

しかし、流れ弾が飛んできては流石に無関心でいられない。

黙つてこの場を去つた場合、一切合財責任を擦り付けられかねなかつた。

声の主は羽黒黒子と、先ほど醜い責任の擦り付け合いを行つていたうちの一人、福本育郎だつた。

広報部に所属する小柄な猿顔の男だ。

クラスメイトの男子たちには、ヨンパチ、というあだ名で呼ばれている。

いつも携帯しているカメラで見目良い少女を狙って、プライバシーとか肖像権とか侵害しまくっている男だ。

当然のごとく、女子の大半からは蛇蝎のように嫌われているが、男子の一部からは妙に人気がある。

隠し撮り写真を売りさばいているという噂もあるが、真偽は定かではない。

こいつはF組以前によく退学にならないもんだ。

俺は二人の後ろ首を掴んでS組生徒たちの前に引きずり出す。

「このチンパンジードもが主犯だから、煮るなり焼くなり好きにしていざぞ」

「あつ、てめえっクゼ！ お前クラスメイトを売るとか仲間意識つてもんがねーのか！」

「そーそー、仲間を売るゲス野郎の言うこととか気にしなくていい系だしー？」

「誰か、数秒前のこいつらをビデオで撮ってないか？ チンパンジーが日本語喋ってる貴重なシーンだぞ」

品性や責任感を問われたとして、こいつらはそんなものはゴミだと鼻糞をほじるだろう。

問題児だらけのF組生徒の中でも特に最底辺に位置する二人だった。



半ば無意識にため息をつくど、S組の集団の中から着物姿のアレが例の変な笑い声を発しながら近づいてくる。

「ヒュホホホ……仲間の山猿にも見限られるとは哀れなやつじゃのう」

「こいつらが仲間に見えるのか？ お前友達いないからって鬨値下げすぎだろ」

「どつ、友達ぐらいおるわ！ お、おお前ふざけるなよ！ 友達ぐらいめっちゃおるわー！」

「……なんか悪いこと言ったか？ 謝るよ、ごめんな」

「なっ、なんじゃー！ いると言っておる！ って、申し訳なさそうに頭を下げるなー！ 殺すぞお前！」

「落ち着けて、俺だつてあんまり友達多くないから気にすんなよ。」

ああ、そういうえば、榎原あたりとよく喋ってたな。お前も友達がいなわけじゃないだろ」

「そつ……そうなのじゃ！ コユキとは今朝も喋ったし、紙芝居もよく見てやっておる。そう、いわば親ゆ「えー、僕ってこころと友達だったの？」……う」

「……」

「朝喋ったって、おはよーって言っただけなのだー」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・んん、んんっ、ごほんごほん・・・・・・・・ああつ、なんだか喉の調子が悪いのじゃっ・・・・・・・・そっ、そろそろ教室に戻ろうかの・・・・・・・・」

むごい。

不死川は背中から撃たれた痛みを誤魔化すかの様に、不自然な咳払いをしながらこの場を立ち去った。

周囲の黒山から投げこまれた言葉は、能天気な声音と反比例して残酷なものだった。気まずさで掌がじつとりと滲む。

うっかり友人関係の話を振ったのが本当に申し訳ないぐらいだ。罪滅ぼしと言っては何だが、今度蟹でも奢ってやろう。

「・・・・・・・・・・」

「おい、待てよ」

気まずさといいたたまれなさに耐えかねて教室に入ろうとすると、S組の男子生徒が喧嘩腰で肩を掴んできた。

誰だったか思い出そうと顔をじいっと見つめるが、どうにも思い出せない。

確かに俺は人の名前を覚えるのが得意ではないが、二か月前までクラスメイトだった者の名前を忘れるほどではない筈だ。

ということはクラス替え前はS組じゃなかったのだろう。

「なんだ？」

「謝れよ。FがS組に迷惑かけたんだぞ？」

悪臭騒ぎやトラブルの原因を作ったことの謝罪を求めているらしい。

高圧的な物言いだ、迷惑かけたことは事実なので謝罪も必要だろう。

「謝る? . . . . . ああ、悪いことしたな。すまない、二度は無いように気を付ける」

「S組の皆さんに迷惑をお掛けしてすみませんでした、と付け足せよ! クズ!」

唐突な罵倒に怒るよりも面喰ってしまふ。

ひよつとしたら、俺は本当にクラスメイトの名前も覚えられないほどの盆暗で、彼はもとからS組にいたのかもしれない。

それとも、新学期からひと月もたたないうちに凄まじい速度で「かぶれ」たのだろうか。

エリートというよりも、チンピラの恫喝のようだが。

「おっと、間違えた。クゼ、だったか。すまないな?」

「……ああ、小学三年生レベルのとっても難しい漢字だからな。読み間違えたって仕方ないさ」

つい、口が滑ってしまった。

早いところこの癖が直さなければ、俺は将来口で身を滅ぼすことになるだろう。

「つ……お前、思い上がるなよ。S落ちのくせに」

「二百八十位の奴がいつまでも二位気取りでデカイ顔してんじゃねーよ久世……じゃなかった。クズ!」

「ブービーとって恥じいるそぶりも見せないんだから、ほんとクズよねー」

もはやF組へ攻撃する口実ではなく、個人攻撃の様相を呈してきた。

ほかのクラスメイト達も参加しているあたり、俺はよほど嫌われていたと見える。

……確かに俺はよく性格が悪いと言われる。無駄に刺々しくて皮肉屋で傲慢だとも。

だが、ここまで嫌われるようなことを何かしただろうか。

気づいていないだけかもしれないが、身に覚えがない。

「言いたいことはそれで全部か？」

「く、久世ちゃん、落ち着いて！ S組のみなさんもそんなに悪く言わないでください！

喧嘩は止めましょう！」

俺が目を細めたのを爆発の前兆と見て取ったか、甘粕が割って入ってきた。

実際のところ怒っているわけではない。羽黒の煽りに比べたらそよ風のようなものだ。

だが、心配してくれているようなので領いて一步下がることにする。

仲裁してくれるというのなら、それはそれでありがたい。

彼女はF組生徒ではあるが、成績的にも人格的にも普通なら攻撃的になるようなものはない。

「でしゃばるなよ」

「内申稼ぎなら教師のいるとこでやれっつーの」

「えっ、そ、その……」

しかし、S組の生徒からしてみれば違うようだった。

自分達以上の成績で、そのうえ特待生でありながらF組に在籍する彼女は目障りな存在なのかもしれない。

去年の事を思い返せば、彼女は一目置かれながらも同時にやつかまれていた。

かくいう俺も入学時に特待生になり損ねて、彼ら彼女らが切実に羨ましかった覚えがある。

だから必死に勉強して成績向上に努めたのだが、まあ、それはいい。

そういうやつかみをひっくりかかめて特待税とでも言おうか……

などとぼんやり考えていると、背後から怒号が響いた。

「アンタ達ねえ！何マヨにまで因縁つけてんのよっ！」

「ち、チカちゃん……」

振り返ると同時に顔を赤くした小笠原とすれ違う。

彼女は肩を縮める甘粕を庇うように背に隠し、敵意も露わにS組の生徒たちに食って掛かる。

この程度の嫌味はS組では日常茶飯事だったから聞き流してしまったのだが、俺の感  
覚は麻痺しているのかもしれない。

しかし、俺の受けていた罵倒よりいくらかマイルドだった筈だが、こっちは庇ってく  
れないのだな。

「変に勘ぐってサイツター。性格赤点なアンタたちと一緒にしないでよね」

「ハッ、自分達の素行不良を棚に上げてよく言えたもんだな？」

「いやー！ スイーツの言うとおりだ！ ちょっと成績がいいからって人のこと見下し  
やがって！ 人として最低だ！」

「……………一応言っておくが、福本。お前に関しては、見下してるのは成績が悪いか  
らだけじゃないぞ」

「チンパンジーの盗撮魔とかキモすぎだし」

「それこそ人としてどうなんだよ、なあ？」

「んだとおテメーら！」

「アンタもう喋らないでよ！」

「味方してやってんだろがスイーツ！」

「逆効果だつて言つてんの！」

「チカちゃん！ ふくもつちゃんも！ 落ち着いてください！」

必死に甘粕が制止するも、もはや焼け石に水だった。

一度派手に燃え上つてしまうと燃えるものが無くなるまで火は消えない。

二時間目まで潰れなければいいのだが、と考えていると、不意に袖を引かれた。

振り返つてみると思案顔のクリスがいた。

「久世殿はもともとS組にいたのか？」

「ん？ ああ……今年のもう二月末までね」

「こちらに来たばかりの自分にはよくわからないんだが、何故F組はこんなに悪しざまに言われるんだ？」

S組は特進クラスだと聞いているが……」

「そりゃあ……迷惑かけているから？」



「迷惑．．．．．というと、今日のようなことだろうか」

「それもある。トラブル多いしな。授業中うるさくて、他の階まで響いていたり、他にも成績不振や素行不良で学校全体の評価を下げたり．．．．．まあ、いろいろだ」

「そ、そうなのか．．．．．？ うむむ．．．．．」

今日来たばかりのクリスには納得がいかないことだろう。

とはいえ、こちらはこちらで好き勝手やっているのだから、ある程度は何を言われても仕方がないことだ。

開き直るではないが、評価を改めさせたいなら勉強なり素行改善なりしてさっさとF組から出て行っている。

事実、F組に落ちてくるものもいれば努力して上がっていくものもいるのだ。

それをしないのはこちらの都合だ。

あちらに斟酌する義務も義理も存在しない。

「（こういうのは聞き流すのが一番だ）」

言って、顎をしゃくって騒動の中心を見やる。

先ほどの喧騒とは打って変わって、凧いだ海のように静かになっていた。携帯電話を見ればもう予鈴まで三十秒を切っている。

さすがに続けて授業をつぶすのは彼らも本意ではなからう。

「さて、戻っ「上等だ!」……え?」

と、思っていたが、実際は凧どころかただの台風の目だったようだ。

彼らはどちらからともなくワッペンを床に投げつけ、再び廊下に雄叫びが響いた。

「決闘だ!」

どうやら、二時間目も潰れるらしい。

## 第四話 dream☆regain

昼休みのグラウンドには観客が詰め寄せていた。

三学年七クラスの学園だけあって、生徒総数は八百を超える。

見渡すだけでもうち半数は見物に来ているのではなからうかというほどの盛況ぶりだ。

どいつもこいつも余程物見高いと見える。

それともそんなに血が見たいのか。

「お昼にー、おにぎりー、サンドイッチはーいかがツスかー。冷えた飲み物もどうぞー」

「鮭とツナマヨと明太子と炊き込みと．．．．．」

「まいどありー！」

購買部や料理部が見物客相手にファーストフードやらドリンクやらを販売している。

そう、結果として、二時間目がつぶれることはなかった。

生徒個人の問題であれば、その場合本人の自己責任で即時決闘が認められる場合が多

い。

だが、今回の場合は個人の問題ではないと判断され、川神戦役と呼ばれる団体決闘を行うこととなったのだ。

取り決めた学園長先生いわく、険悪化した二年F組とS組の関係を一度リセットする為らしい。

確かに今回のトラブルは表面化したほんの一部のものであり、常日頃からいがみ合っているのは事実だった。

ただ、こんなことをしたところで本当の意味で関係改善されるとはとても思えないが。

「ミックスサンドと……牛乳ありますか？」

「ありますよ」

「どうも」

代金と引き換えに品物を受け取る。

本来ならば学食で定食でも食べている時間だが、あと十分もしたら最初の競技が開始される。

二時間目がつぶれずに済んだのはいいのだが、これじゃあゆつくり食事もとれやしな  
い。

「えー、クゼ君それで足りるの?」

牛乳パックにストローを差し込みながら座る場所を探して視線を巡らせていると、背  
後から声がかげられた。

聞き覚えのある声に振り返ると、最近見慣れたポニーテールの少女が。  
今さつき、購買部の列で前に並んでいた少女だ。

「後で食いなおすからいいんだ」

「エネルギー補給しないと体が動かないわよ?」

「これで十分だ。運動前に食いすぎると気持ち悪くなるぞ」

「もしかして減量? 骨くつついてまだ半月なんだからちやんと食べなきゃ」

「人の話を聞けない子です、って通知表に書かれたことあるだろ」

話半ばに手にしたビニールからおにぎりを取り出した彼女の名は川神一子。

クラスメイトにして、ここ神奈川は川神で最も有名な武術寺、川神院の総代の孫娘でもある。

二年F組においては、ワン子、というあだ名のほうが通りがいい。

犬のように人懐っこいこととか、一の英語読みが由来だとか。

年頃の少女にあるまじき立ち食い姿に目をそらすと、視界の隅に金髪が揺らめいた。

誰だろう、クリスだ。一子と同じようにビニール袋を提げている。

非日常的な外見の美少女が所帯じみたグッズを携帯している様はなかなかミス  
マッチだが、ありだ。

相手もこちらに気付いたようで、軽く手を挙げて声をかけてくる。

「久世殿……と、犬じゃないか」

「クリじゃない」

「なんだ、その犬とか栗とかってのは」

「クリスだからクリ！ アタシが考えたあだ名よ」

「犬は自分がつけたあだ名だ！ ワン子と呼ばれているのだろうか？ 似合いじゃないか」

「なによっ！ 喧嘩売ってんの!？」

「そつちこそ！ 勝負ならいつでも受けるぞ！」

あつという間にヒートアップした。いつの間にそんなに仲良く、もとい、悪くなったのだろう。

休み時間に彼女たちが話しているのは見かけたが、ほとんど初対面の相手につけるあだ名だろうか。

このまま立ち去ろうか、と数秒悩んでから、水を差すことにする。

「……二人とも、何買ったんだ？」

「え？ アタシはシヤケとツナマヨと明太子と炊き込みのおにぎり……あと牛乳だけだ」

「これから勝負だというのに、そんなに大量に買い込んで……」

「あげないわよ！」

「欲しいとは一言も言っていない。自分にはこれがあるからな！」

そういつてクリスは手から提げていたビニール袋からいなりずしのパックを取り出した。

貼られている値札シールから察するに、今さつき一子が購入したおにぎりと同じ製造元だろう。

あれをちゃんと作るのは意外と面倒くさいのだが、いつの間に仕込んでおいたのだろうか。

「どれどれ………？ うん、おいしいじゃない」

「うおわー!? 自分のおいなりさんが!」

「一つぐらいいいでしょ」

「よくない! ……ならば、こうだ!」

「ぎゃー! なにすんのよ!」

「お前が先にやったことだろう!」

犬と栗というよりは、犬と猿というべきか。

いや、この二年F組に猿はもういるし、仮にも外国からやってきた令嬢にその形容は似合わない。

ひったくったツナマヨおにぎりをハムスターのように頬張る姿に令嬢らしさは欠片も見えないが。



「むぐっ………！」

「ほら」

「………っ！」

急いで食べたせいで喉を詰まらせたクリスに牛乳を渡した。

渡してから飲みさしだということを思い出したが、既に牛乳パックは萎んでいる。クレイジーな父兄に怯えるわけではないが、余計なことは言わない。

「………す、すまない。助かった」

「ああ、どういたしまして」

「よく噛んで食べないからそうなるのよ。修業が足りないわね！」  
「ぐぬぬっ」

喉に詰まらせずに相手から奪った食べ物を食べる競争をやっていた訳では無かった筈だが。

なんにせよ、よくわからないが決着はついたらしく、歯噛みしつつもこれ以上揉める

様子はなかった。

「……水飲みに行ってくるか。サンドイッチいるか？」

「えっ、いいの？」

牛乳が無くてはサンドイッチも食べづらいし、食欲も無くなってしまった。

代わりを買うにも財布の中にはあまり入っていない。

ここから三十メートルほどの運動部部室棟の前にある手水場の水は昼間でも冷たい。

あそこで水でも飲もうか。

《……これより二年F組対二年S組の川神戦役を開始する 両クラス共にグラウンドの……》

しかし、その時間もないようだ。

気合を入れなおすつもりでかぶりを振り、俺は指示されたF組陣地へと向かうことにした。

. . . . .  
 . . . . .  
 . . . . .  
 . . . . .

《一年生は知らん者もおおかろう．．．．．ワシ、説明しちやおうかな。

川神戦役とは五つのテーマごとに抽選で競技を決め、総合力を競う決着システムじゃ。

決闘システムの組対抗版、と言ったらわかりやすいかのう。

種目ごとに勝者は相手クラスから一名指名して自クラスに編入させることが出来る。

五勝すれば五人奪い、五敗すれば五人奪われる、というわけじゃ。もちろん奪い返すこともできるぞい。

なお、今回は特別ルールとして、時間の都合で三戦のみとする。

また、決闘の趣旨を考え、すべての競技に同じ生徒が出るようなことは禁止。一人一  
種目までじゃ》

進行役の学長先生のとでもわかりやすい説明に、なるほどなー、と一子が頷いている。

かくいう俺も概要は大まかに知っていたが、実際参加したことはなかったので再確認できた。

しかし、勝利したとして誰を奪うというのだろうか。

自分のクラスに引き入れたいと思うような、そんなめぼしい生徒が相手のクラスにいるだろうか。

ちらり、と自クラスのメンツに視線をやる。

「よっしゃ、綺麗どころ纏めてかつさらってやるぜ！」

「まずは榊原指名しよーぜ！」

「え、トーマ君がうちのクラスにできれば二年のエレガンテ・クアットロが揃うってこと？」

「……逆にS組の生徒としては自分のクラスに欲しいと思うような生徒がF組にいるのだろうか。」

ちらり、とS組陣地に視線をやる。

「勝利は当然としても、高貴なるSに無礼で下品な山猿なぞ不要なのじゃ！」

「ははっ、同感だけど、奴隸としてなら使つてやつてもいいんじゃない？」

「……ふむ。確かに、上下関係を叩き込んでやるにはちょうど良い機会かもしれないの。」

あやつめ、首を洗つて待つておれ……！

「勝てば一子殿を……いや、困らせるのは我の本意ではない」

「海より深いお心遣いに感動ですう、英雄様つ☆」

「勝てば委員長を……いや、困らせるのは俺の本意じゃない」

「それはもしかして英雄様の真似ですか？　ぶっ殺しますよ☆」

「ひいつ、そんなつもりは毛頭無いです！」

「あ、？　毛根無いの間違いだらハゲエ！」

俺個人としてはともかく、好みは人それぞれということでは気がを上げている者は多いようだ。

しかし、指名された上で奪還もされず終了した場合、本当に次回の定期テストまで手のクラスで過ごさなければならぬのか。

この川神学園の一学期には中間テストが存在せず、期末テストの一本勝負だ。

となると、特別な理由でもない限り、向こう三か月近く出先で授業を受けることにな

る。

すぐに馴染めるやつならいざ知らず、日ごろ相手のクラスを目の敵にしているような奴は俺が受けた程度の仕打ちでは済まない筈だ。

さらに言えば、授業内容も両方受けてみたところ、かなりレベルに隔たりがあると感じた。

犬が猿の群れに混じっても、猿が犬の群れに混じっても、どちらもストレスで死んでしまおう。

S 落ちして出ていった俺を好き好んで連れ戻そうとする奴がいるとは思えないが、選ばれたものにとっては哀れな話だ。

《一回戦のテーマは身体能力じゃ!》

《決闘方法は……野球!……おい、放課後までかかるぞジジイ》

《安心せい、ツーストライクからはファールでもアウトで三回裏までの特別ルールじゃ。

さらに、男女比は五四、どちらが五でもええぞい、なるようにチームを編成せい。

編成の待ち時間は二分じゃ……始め!》

スピーカー越しに聞こえてきた声に、無意識に背筋が伸びた。

「どうやら一回戦の種目が決まったらしい。

いつも行事の際に設営されるパイプテントの観客席を見れば、進行役の学長先生こと川神鉄心の隣に女が座っている。

実況の、川神百代だった。

この学園では言わずと知れた有名人である。

三年F組在籍、川神院の次期総代であり、武神の異名をとる武道家だ。

言わずもがな、一子の姉である。

「野球、九人か．．．．．軍師としてはあまり手札は切りたくないけど、下手に温存しても奪われちゃ意味ないしな．．．．．」

最悪ファミリィで四、五人経験者出せるけど、腕に覚えがあるやつは手を挙げてくれ」

「授業ぐらいでしかやったことないなあ．．．．．」

「同じく」

「一応、授業以外にも代行行業で経験はそれなりにある」

「それじゃゲンさんもお願い」

「しようがねえな」

仕切り屋として直江が音頭をとると、あつという間に面子が埋まってグラウンドへと向かっていった。

三分の一がいつも彼とつるんでいる、所謂風間ファミリーのものたちだが、いつも携帯いじっているだけあつて顔は広いらしい。

まあ、野球部員の一人もいないF組じゃ、誰が入っても大して変りはしないだろう。

俺も多くのクラスメイト達と同じで野球経験は授業でのもののみだ。

回数にして十を超えはしない。

このクラスになってからは体育の授業で一度だけ野球をしたが、捕球を何度もしくじってなじられた覚えがある。

「クゼちゃんスポーツ得意でしたよね？」

「いや、野球は苦手だ。フライなんかどこに落ちてくるのやら……」

内申点に優がもらえたからといって、すべての種目で活躍できるわけではない。

甘粕の問いに答えながら、俺はF組陣地近くの石段に腰を下ろして観戦する。

他にも何人ものクラスメイトたちが思い思いに駄弁ったり、応援したりしていた。



「僕もそうなんだよね。体育の授業じゃいつも後ろにそらしちゃう」

すると、俺の返答に共感を覚えたのか、クラスでは二つ隣の席の熊飼満も会話に加わってきた。

背丈は百七十九の俺と大して変わらないだろうに、体重は百二十を優に超えていそうな巨漢だ。

温和な性格のようで、S落ちしてきた俺を気を遣ってくれているのか、何度か昼食に誘われたことがあった。

低血糖でもあるまいに、いつも何かしら口になっている。今現在も。

「本の知識であれだが、落下地点の予測は勘を練習で養うしかないそうだ。

後は、多めに下がって前でとるようにするとか……あ、島津トンネル開通」

「わ、暴投だ」

「あれじゃランニングホームランだな……ええと、それは……何？」

すっぽ抜けてあらぬ方向へ転がっていくボールを必死に追う巨体から視線をうつし、隣の巨体が齧る物体に目をやる。

外側の一部は茶色くて、内側は黄色い、カステラのような見た目。甘いものはあまり食べないが、おいしそうに食べているのでふと興味がわいた

「七浜駅前にある賀茂屋のパウンドケーキだよ。食べる？」

「いや、いいよ。ゆっくり食べてくれ……七浜駅前の……ああ、あそこ  
のプリンをこの間買ったよ。評判良いから土産にしたんだ」

「プリンおいしいよね。あそこは毎日相模原から新鮮な卵を仕入れてるんだよ」

「詳しいな。バイトでもしてたのか？」

「実は何度も通って調べたんだ。どうしても気になって」

「料理が趣味なのか？」

「うん。食べるの好きだし、自分の作ったものを人に喜んでもらえたら自分も嬉しいよね」

「そうか……そうだよな」

「あ、チェンジだって」

彼が指で示した方を見ると、確かに攻守が入れ替わってクラスメイト達がこちらの陣地に向かっていた。

しかし、三分にも満たない会話だったが、彼への印象が少し変わった。

おっとりした食いしん坊としか見ていなかったが、情熱をもつて打ち込むものがあるらしい。

なんだか彼のが少し好きになった。

「最後は三球三振で抑えましたよ！ 椎名ちゃんすごいです！ がんばれーっ！」

「おう、まだ一点だ。がんばれ。確かに椎名、結構いい球放るな。矢の様だ」

「弓道部ですからね」

「関係なくね？」

「お前の言う通り椎名いい体してるよな。ちつくしよう直江のヤロー羨ましいぜ！」

「俺そんなこと言つたっけ？」

「ワン子、ピッチャーに色仕掛けよ！」

「混乱させるだけだぞ」

「あ、でも打った！」

「おー……あー……あー……」

「まだ逆転のチャンスはありますよ！ みんながんばってーっ！」

「あ、打たれた。ホームランだ」

「が………がんばってーっ！」

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

残念ながら、声援や士気で実力差を切り崩すことはできなかつた。

2対0で勝者S組。相手のピッチャーで四番の男、九鬼英雄の独壇場といつても過言ではない試合内容だ。

ホームランで一打点を上げた上に、三回までとはいえノーヒットノーランである。

彼の剛速球はヒットどころか一子以外は触れることさえできなかつた。

葵に聞いた話によると、彼は何年も前に肩を痛めて野球への道を断念したそう。

三回九人、三十球にも満たない投球だから投げられたのかもしれないが、後遺症など微塵も感じられない見事なピッチングだった。

何年も離れていれば手足も伸びて体格も変わるし、フォームも維持できないだろう。

下手をすれば、ストライクゾーンに入れることも叶わない。

もしかしたら、道を断念しても体に負担がかからない程度に練習をしていたのかもしれない。

れない。

「・・・・・・・・」

不意に、幼いころの記憶が蘇った。

葵達に連れていかれる自称軍師をよそに、俺の視線は次の試合内容を読み上げる川神百代に向かっていた。